

マスターズを彩るレジェンドたち(11)

皐月から水無月の6月へ。今年は例年に比べ梅雨が早く、地域によってはうっとうしい空気に包まれたはず。ここは梅干しでもノドを通して、新型コロナウイルスの対策でも。各地の大会から景気のいいニュースも入らず、寂しい日が続く。毎号代わり映えしないが、今日もレジェンドたちの活躍ぶりを紹介したい。どうかご愛読を。

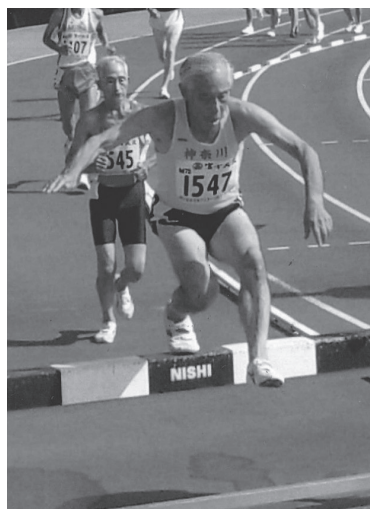
写真／高原良祐さん、秋田ソノ子さん

マスターズ陸上の先達たちに感謝を
高原良祐さん(86歳・神奈川)

「いやあ、うれしかったですね。あのときの喜びは今でも覚えていますよ」と言い、笑みがこぼれた高原良祐さん(86歳・神奈川)。

喜びとは1999(平成11)年11月20日から3日間、熊本市の熊本県民総合運動公園競技場で行われた第20回記念国際・全日本マスターズの60歳以上で競う2000mSCでのこと。レースは常勝といわれる63歳の高山勝さん(福島)と高原さんの争いとなったが、高原さんが8分40秒25で、8分45秒42の高山さんを破ったのだ。高原さんは全日本大会初参加だった。

当時の高原さんは64歳。高原さんにとっては全日本マスターズ陸上で優勝は、M60クラス(60～64歳)で



高原さんがマスターズ陸上と縁を持ったのは、役職から身を引いてから。定年前には企業内の陸上部立ち上げに尽力し、後輩の指導にも精を出した

という年齢的に不利な条件での、初めての美酒だったのだ。全日本大会を除く各大会でどうしても勝てなかったライバルを抑えたのだから、その喜びも分かるというもの。

温厚な人柄だが、スポーツマンらしく、正しくないことには、堂々と正論を吐く。2019年度のマスターズ連合会報の『創立40周年記念誌』に「年輪の幅が狭くなる気がする」と題して寄稿文を寄せてあるが、そのなかの一文によると――。

「マスターズ陸上制度の5歳刻みクラス別表彰は絶妙です。継続性と楽しみをくれます。一年経過するのが早く、年輪を広げ重ねるのに何の苦も感じられないのは、日本マスターズ陸上制度のおかげと感謝しています」

と、クラス別制度のマスターズ陸上の先達たちに感謝の念を忘れない。高原さんがマスターズ陸上と縁を持ったのは、役職から身を引いてからである。陸上の仲間から神奈川マスターズの存在を知らされたのがきっかけだった。以後、あらゆるところでのマスターズ陸上に参加している。

定年前には企業内に陸上部を立ち上げたり、後輩の指導にも精を出した。陸上にそこまで興味を持つのは、若いときから陸上と親しんでいたからだ。現在は神奈川県横浜市に住んでいるが、出身は大分県中津市。中学2年生から陸上部で活動した。

中津西(現・中津南)高2年生の1952(昭和27)年の冬には、当時大阪で開催されていた全国高校駅伝に大分代表として出場。戦後でまだ食糧事



スペインのサンセバスチャンで行われた第16回世界マスターズの2000mSCで優勝した高原さん。8分28秒09で走り初の金メダルを獲得した

情が悪く、米持参の時代を懐かしむ。高原さんはエース区間の1区10kmで浪速の地を駆けている。

マスターズ陸上で参加した大会のなかでは、2005(平成17)年8月にスペインのサンセバスチャンであった第16回世界マスターズのM70・2000mSCに、8分28秒09で優勝。初めての金メダルを獲得したことも思い出深い。ほかにも1500mでは5分37秒74で5位に入賞した。70歳だった。

その後、2018年に同じスペインのマラガで開催された第23回世界マスターズでは、M80・4×100mRで3位、4×400mRで2位となり、両りレーの3走として活躍した。

マスターズ陸上に情熱をもって取り組んでいる高原さんが、先述の会報で触れているように、2020年にカナダのトロントで行われる予定だった第

24回世界マスターズが新型コロナウイルスの流行で中止になったことを悔しが「楽しみにしていたのに、残念の一言に尽きます」。

残念そうな表情だが、再び世界で走れる日まで――。

立五段跳に魅せられた 秋田ソノ子さん(82歳・奈良)

水泳・陸上の合同で実施された「2018国際ゴールドマスターズ奈良大会」が行われたのは同年10月27日と28日。陸上は「ならでんフィールド(奈良市鴻ノ池競技場)」で熱戦を繰り広げた。そのなかの女子W75(70～74歳)クラスの立五段跳が目玉の一つだった。

奈良が地元である秋田ソノ子さん(当時、79歳)と、渥美裕子さん(同75歳・滋賀)が同クラスで争うからだ。秋田さんは9月に鳥取であった第39回全日本マスターズで8m88の日本新で1位、渥美さんも8m63の日本新を出したが、2位となった。

今回の奈良シリーズでは渥美さんが4回目の試技で8m71のベストを出し、秋田さんの8m51を抑えて雪辱。ただ、公認日本記録の8m86を5月に出した秋田さんの記録には及ばなかった。二人の争いはW75・60m(－1.1)でも見られ、こちらも10秒04の大会新でフィニッシュした渥美さんが勝利した。

一方の秋田さんは10秒95だったが、選手としてだけでなく、大会の裏方として小まめに動き回っていたこともあり、十分に調整して試合に臨んだのではなかったのだ。

今や短距離と立五段跳がお気に入りの秋田さんは、W75立五段跳で8m86の公認日本記録、8m88の日本新をマークしている。だが、8m93を跳んだ渥美さんに公認日本記録の座を明け渡した。秋田さんがマスターズ陸上に夢中になったのは、お子さんが入っていた陸上教室を鴻ノ池競技場に行行ったのがきっかけ。

「いい雰囲気血が騒いで。私も身体を動かしてみよう」と市内のスポーツクラブに入会。「実際に体を動かして汗を流してみると、年齢を忘れ若返りを感じました」。ご主人が亡くなった後、奈良マスターズに入った。75歳だった。なぜ陸上を――。

もともと同市立一条高で陸上に打ち込んでいたのだ。「昔取った杵柄」を思い出して」と笑った秋田さんだが、高校時代にやっていた「短距離と跳躍」をすることに。奈良でW75・60mを走って見たら10m99だった。当然、奈良県内ではトップ。

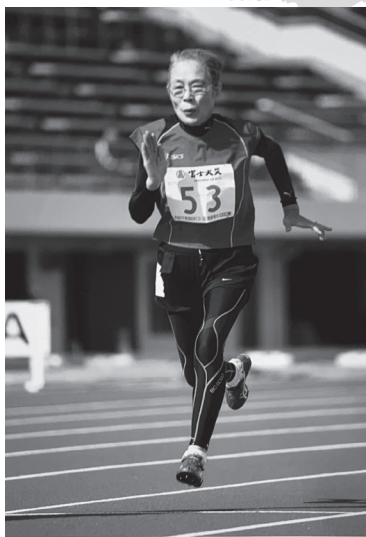
2016年に77歳を迎え、新潟であった第37回全日本マスターズに初参加し、W75・60mと100mに挑戦した。60mは11秒60(+0.4)、100mが20秒83(+0.5)で2種目2位と好成績を記録。78歳になった年から始めた立五段跳では、8m86をマークした。

2017年の第38回全日本マスターズ(和歌山)では立五段跳が新しく加えられた。胸を膨らまして参戦した秋田さんのW75立五段跳は、8m11の大ジャンプ。2位に9cm差をつけてのトップでしかも日本新。「うれしかった。一番の思い出です」。100mは18秒52(+1.2)で3位だった。

翌2019年には79歳と不利な年齢ながらも、8m16を跳んだ。

それだけではない。2019年中に80歳となった第40回記念国際・全日本マスターズ(群馬)では、W80・100mだけは18秒65(+0.5)の2位だったが、走幅跳が2m87(+0.3)、立五段跳が8m56と、跳躍2種目で日本新を樹立したのだ。秋田さんは「立五段跳を始められたマスターズ連合会長の鴻池清司さんは素晴らしい。鴻池さま、さますよ」と。

現在82歳となった秋田さんは「もっぱら練習は家の庭か、部屋の中で。コロナ禍でほとんど外出していません。部屋の中をぐるぐる走ったり、ゴムを引っ張ったりして筋力が弱るのを防いでいます」と話す。庭で「立五段



お子さんの陸上教室を見に行ったのがきっかけでマスターズ陸上に夢中になったという秋田さん。2019年には80歳となり、第40回全日本マスターズ(群馬)で走幅跳と立五段跳の跳躍2種目で日本新を樹立した

跳のマネごと」をしているようだ。

コロナ禍で大会がないことを寂しがる秋田さんの今後の目標は「年齢が上がっても、ベストの記録を出せるように頑張ります」と明るい声で。



以前にも触れたことがあるが、秋田さんを語る上で紹介したい人がある。コーチ役の狭川富美さんだ。

狭川さんは光華学園(京都)に学び、先述の渥美(旧姓・塩尻)裕子さんの後輩。1964(昭和39)年、高2のインターハイでは、五種競技で3位。高3では近畿インターハイで4037点と初の4000点を突破する高校新を。夏の大分インターハイでは後半に疲れが出て、4008点にとどまったが、再度の高校新で高校一に。走幅跳も4位に入った。

秋の日本選手権では4168点と記録を伸ばし、高校新で2位に食い込んでいる。五種競技で鳴らしただけあって、すべての競技の指導に適した指導者だ。

高校卒業後、大体大に進学した。秋田さんと同じ奈良で陸上の指導役をされており、秋田さんがコロナ禍で、ぱったりと練習に出てこなくなるまで狭川さんはしっかり練習に付き合った。